KADOKAWA NOVELS

洋上の《アーク》を襲う新たなる危機。
緑なす地球を掌中にするのは神か魔か人
人気空前の伝奇SF巨編、絶好調!

カドカワノベルズ

昭和六十二年十月二十五日初版発行
昭和六十三年七月二十五日三版発行

著者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　角川春樹

魔界水滸伝（まかいすいこでん）13

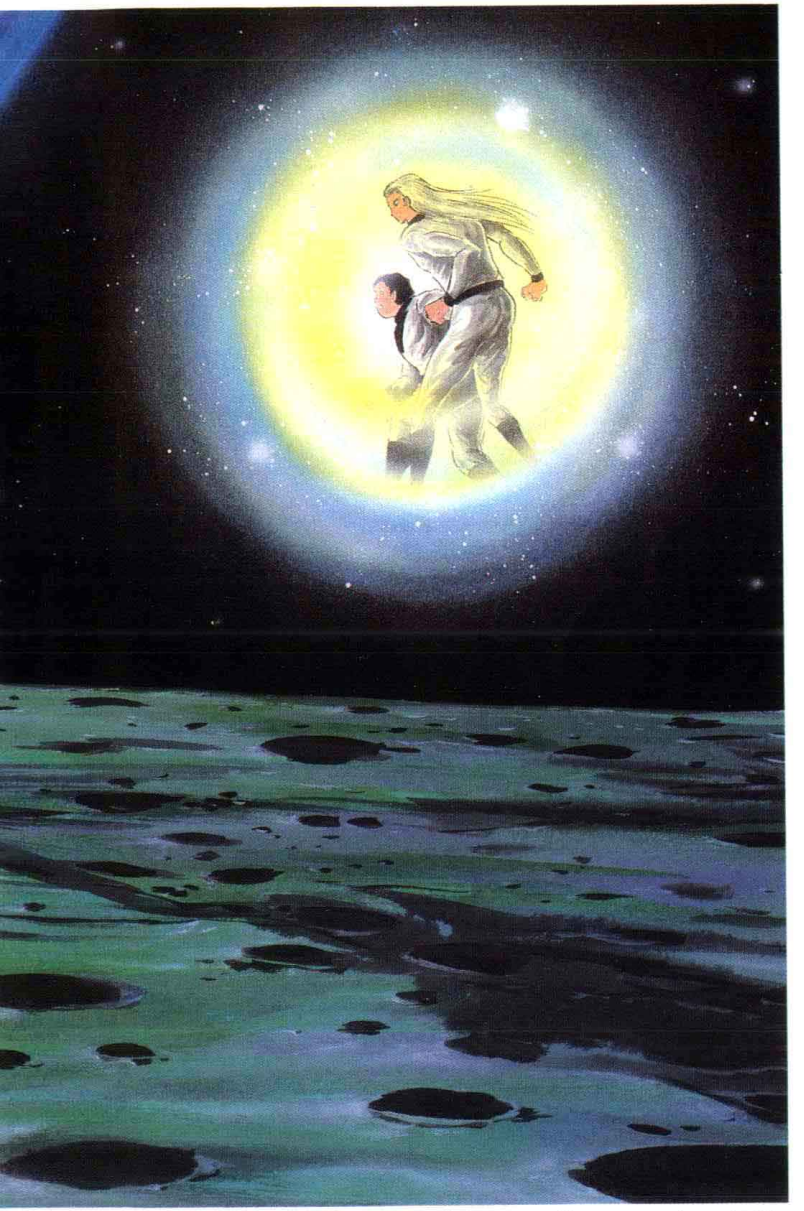
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三　振替東京三―一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三―八一七―八五二一　編集〇三―八一七―八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-770913-1 C0293

魔界都市ケイオス——異形(いぎょう)の、異次元の共生都市のさなかを、そのぬらぬらとつねに分泌しているかのような怪しげな世界の中を、一人の妖魅(ようみ)が歩いていた。その首から上には、頭がなかった。

(本文第五章・3より)



そこは、空中であった。足もとはるか下の方に、荒涼たる月の風景——そこに、ガイアによく似たもう一つのWWSAの基地があった。（本文第八章・1より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

那須のいのちをうばった信管の爆発は、ガイア基地の爆薬の起爆装置をも破壊した。おそるべき震動と火柱が、月全体をゆるがした。その大爆発は、地球からもはっきりと見えた。（本文第八章・3より）

KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝13

栗本 薫

バー絵・口絵・本文イラスト／永井豪

第五章

1

「あ……」

ハナンは店先に立った人の気配に気づいて、目をあげて見た。そこに立っていたのは、顔見知りの隊長のカンハだった。

「こりゃ隊長さん」

「よう、ハナン」

カンハは目をぱちつかせながら、ハナンを見おろす。カンハは背が一リアもあるので、とても大きい。

「どうだ、商売は」

「こんなもんですよ。このとこどうも、アボンガボンの具合がわるいので、ちょっと心配ですがね」

「そりゃ、やっぱり、水にあわねえんだろうなあ」

「さいで」

「とりあえずルフルフを一杯くれんか」

「ルフルフを、へいへい」

のたのたとハナンは立ってゆき、緑いろのコップにルフルフをぎゅっと絞り出す。つんと青くさい匂いがただよう。ルフルフは怒ってぶーっとふくらんで、空中にうかびあがり、漂いはじめた。長い緑色の尾——実はそれは繊毛なのだが——がゆらゆらと店の中をうろつきまわる。

「四ドランドランで」

「ほれ」

「こりゃどうも——」

「ハナン」

細長いコップに、丸い長い筒状の舌をさしこんで、ルフルフをじゅっと吸いとったカンハは意味ありげに声をひそめた。

「きいたか、ええ」
「何をです」
「おかしなうわさがあるぞ」
「おかしなうわさ、で？」
「そう、おかしなうわさ、だ」
「と、いいますと」
「実は、おかしな話をきいたんだ」
カンハはべろりべろりと、青黒い鼻のまわりをなめている。
「町の連中が、このごろ、少しおかしいそうだ」
「……」
「パウリスの方向へ」
カンハは秘密めかして声をおとす。どっちみちぎゃあぎゃあ声でしかないのだが。
「出ていって、見てるそうだ」
「――？」
「エンゾシアラ様が言っておられた」
「……」
「岩の上に連中が群れて、とおいパウリスの方をじっと見ている、おかしな奴らだ――と」
「それが、おかしなことで」
「そ、それだけじゃない」
びくびくっとひらべったい手をふりまわしてカンハが言った。
「岩からとびおりて、体液をまきちらしたりするのだそうだ」
「……」
やはりカンハたち隊長族と、自分たちノーマッドでは、全然ちがうのだとハナンは思った。
どうして、西の岩の上から、パウリスやそちらの方を見たり、とびおりて体液をまきちらすのが、おかしなことか、まったくわからない。別に、ハナン自身はいまそうするわけではないが、することもあるだろう。ハナンはふしぎそうに丸い目をぱちつかせ、たかだかと天井にぶつかりそうになったルフルフの繊毛をつかんで下にひきおろした。

「おとなしくしてろ」
透明な半球をいくつもくっつけたようなルフルフには、絞ってももうなみなみと緑いろの漿液がたまってふくらんでいる。ハナンはルフルフの繊毛を、パゴン・パゴンの根かたにまきつける。
壁はゆっくりと脈うち、のびちぢみしていた。ふとい血管が青白く壁を縦横に走りまわり、ちかちかっと小さい火花がそれを這いまわる。どくん、どくん、と壁は息づいている。ジュクジュクと足もとから、ねばつく漿水がしみだしてくる。ヘボムシがさわさわと這いまわっている。
もう、食事はすませていたのだが、そのさわさわさわ……という音をきいていると、急に口の中に唾がわいてきた。と思ったときには、もうシュッと口から長い舌がとび出して、ヘボムシのよく肥った汁気の多そうなのを一匹、つまみあげていた。
さわさわさわ——と、無数の足をバタつかせてもがくのを、舌の上にのせて口にまきこみ、まずキチン質の固い舌ざわりを楽しんでからじゅうと吸いこむと、小さなぴしゃりという音を立てて、口の中にたっぷりとヘボムシの体汁が流れこむ。ていねいに吸いつくして、ペッと殻を吐き出す。
とたんにパゴン・パゴンがさっと白いつるをのばしてそのカスをひったくり、自分の根かたに押しこんでしまった。
カンハはいくぶん、嫌悪の目でみている。隊長族はヘボムシを汚いの、下品だの、大便くさいのといってあまり好まない。もっとも空腹になればどうせ、何だって食べるくせに、とハナンはいつもひそかに思う。
「もう一ぱい、ルフルフはいかがで。サービスですよ、旦那」
「エーアー」
カンハが言った。
「すまんな」
そこでハナンは別の、まだ小さいルフルフをたぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

りよせてぎゅっと絞った。ついでに自分のも絞る。
「まだ、植えたばっかりなんで、青くさいかもしれませんが」
「パウリスといえば南側の＊△π――＊でおかしなことが起ってるらしい」
カンハは、超音波をまぜないと発音できない、そのわけのわからぬ音をたくみにまねてみせた。
「おかしなことで」
「オモが逃げ出してるそうだ。オモをとりにいったゲベランが言ってたが、だんだんオモが少ないといっていた。増殖のシーズンでないのかな」
「……」
「神官様や僧の方々がお困りになる。召上りものがないからな」
ハナンはうなずいてはみせた。しかし、オモの漿液を吸う、などという夢のようなぜいたくにはついぞ縁のない、しがないノーマッドの身の上である。内心、くそくらえ――というかヘボムシ食いになりやがれ、と思っているのであった。
オモというのは、およそこの世の食物の中で最上至高の美味で、いったん味わったらとうてい忘れられない、という話もきいている。あまりに妙な話すぎるので、よくつかめないのだが、オモには殻がないかわりに、肉質の中にキチン質よりもっとかたい芯があるのだそうだ。その中にもおいしい汁がある。だからオモは、殻ごと丸々吸いつくせる。どろどろとして、他の食物とは比べ物にもならぬ、のだ、という。
あまりに美味なので、オモもオモを食べる。だからオモはなかなか手に入らぬし、そのうちいなくなってしまうかもしれない。死ぬまでに、――というかヘボムシ食いがヘボムシのエサになるあのときまでに、一回くらい、オモを食ってみたいもんだ、というのは、ノーマッドのひそかな望みである。
「まだ、ある」
カンハはなかなか話をやめないので、ハナンは苛

立って鼻の孔をひこつかせた。
「オモがときたま、ケイオスを歩いてるそうだ。どうしたものかな」
「……」
この話も、ノーマッドのハナンの注意をひかない。うまく、そのオモとぶつかって食えればいい、というような思いが、ちらときざした、だけだ。
カンハはあきらめたようにひれをふると、ぬらぬらした体液のあとをのこしてさよならもいわずに出ていった。すぐに店は口をとじた。どっとヘボムシがむらがり出てきてカンハの足あとにたかり、体液のしみをなめはじめる。とりあえずはハナンの腹はみちている。
カンハが出ていったとたん、もうハナンは、カンハのことを忘れていた。ずっと何か考えていたことがあった——何だっけ。
「エーアー」
そうだ、思い出した。
アボンガボンの肉芽を少しつみとってみようか、と思っていたのだ。
アボンガボンの入っている、奥のへやへゆくと、アボンガボンは気配を察して、ギャーギャーとさわぎだした。アボンガボンはテレパシーがあるから、一つが叫び出すと、このへん一帯のアボンガボンがみんな大さわぎになる。
しかし今日は、やらなくてはならない。ハナンは尻尾に体重をかけてのびあがると、アボンガボンの肉芽をがぶりとかみとった。
たちまち声にならぬ悲鳴が充満して、どくんどくんと家の脈うつのは何倍の速さになる。口にほおばった肉芽をペッと吐き出す。病気かもしれないから、吸わぬ方がいい。
アボンガボンは悄気てさわさわとちぢこまった。ポタポタと透明な黒っぽい液が傷口から垂れている。その下にシャワシャワ、シャワシャワとヘボムシがあつまってくる。吐いてすてた肉芽はもう、いちば

ん大きいヘボムシ共にびっしりたかられて、うねうねとうごめいている。
どくん、どくん、と壁が脈うった。
しゃ、しゃ、しゃ、と血管に液が走る。
その上をリンの光がまとわり、走りぬける。
ハナンはわけもなくベラベラと舌をうごかしてから、ペタリ、ペタリ、と足音を立てながら、店の方へ戻っていった。
入口に、フナオが立っていた。
「アボンガボンに何かしたずら？」
「したよ」
「家のアボンガボンがちぢかんじまったでねえか」
「ルフルフを一個もってきな」
フナオがたかりにきたのがわかったので、不愉快だったが、ルフルフをたぐりよせ、その結球をひとつもぎとって投げてやった。フナオはたちまち長いベロでまいてうけとめた。
「こら、すまねえこんだな」
ペタリ、ペタリ、と音を立てて、街路へ戻ってゆく。それを見送ってハナンは鼻孔をひろげ、ガーッと不快の音を立てた。
「ハナン」
声がした。
また、誰かが、たかりにきたのか、と、つくづくおのが同胞の盗っ人根性に苛立って、ハナンは考えたが、首をぐるりとまわすとそこにルスのすがたがあったので、急に気分がやわらいだ。自然に首がにゅーっとのびて、口が横ににへらにへらと開く。
「もう、神官様の御用は、おわったのかい、ルス」
「いまはいいの。――ハナン、明日……」
「まあお入り」
長い舌をのばし、床をうごめいているヘボムシの中から、とりたててよく肥えて汁けの多そうなのをシャッと巻きとって、舌の先でルスの方にさし出してやると、ルスははじらいながら舌をチロチロとのばしてきて、舌をからませ、ヘボムシをうけとった。

ルスがうまそうに吸いつくすのを、満足して、ハナンは眺めていた。
「うまい？」
「おいしい。ヘボムシ、おいしいわね、ハナンのは」
「ルフルフを一杯あげよう」
「ううん、いいの。いま、オルマをいただいてきたから、神官様のところで」
「……」
「ハナン、明日、ダゴンの日よ」
「そうか、そうだったな」
「約束したじゃない、一緒に、いるって」
「そうだったな」
何の感慨もない。ダゴンの日は、何期に一回ずつ来る。ダゴン様がどのイームーを、何人召し上るのか、誰にもわからないが、それはどうでもいいことだ。ただ、ルスと一緒にいて、できれば食べられるなら一緒に、生きのこるなら一緒にしたいのだ。ダゴン様が召しあがったイームーは、神官様に生まれかわるのだそうだが、それもどうでもいい。
「ハナン、ちょっと、外、いかない」
「ああ」
店をしまって、ハナンとルスは、のろのろと街路に出た。
そこは、ぬらぬらとした半透明のゼリー状の道である。
音もなく、白く透明なユキムシがたえずふりそそぎ、視界は永遠のモノクロームの黄昏だ。朝も、夜も、ともにかかわりのない、灰色のよどんだ水底、なまあたたかくじっとりとした空気。
動脈のようにうねうねとのびてゆく街路の両側に、ごろごろと、円筒形や内臓型の家々がかさなり、くっつきあっている。街路樹はびっしりとユキムシの白い死骸をこびりつかせ、その筒状の葉をたえずくねくねとさせている。ルフルフやパゴン・パゴン、イーイーやグが、うごめきまわり、空中を浮揚し、

上ったり下ったりしている。ときおりグかルフルフの結球の熟れすぎたやつがパチンとはじけて、緑の霧を吹きちらかす。

ずっと彼方には黒い巨大なダゴン神殿がそそりたち、妖しく息づいていた。その上にウニのように生えている無数の黒い塔は、時たまブルルとふるえて、ビュッとユキムシを射出する。

あちこちをのろのろとイームーたちがうごめいていた。裸のノーマッドから長衣の神官、軍服の兵士たち——たまに、よその町からきたらしい黒小人イラックや、毛むくじゃらで四つ足ではねるサータナが、カヤクに乗ってすーっと街路の半リアばかり上をゆく。かれらには、このぶるぶるふるえるゼリーのかたまり、魔界都市ケイオスが気にくわないのだ。どこからどこまでジュクジュクして、タラタラして、臭気を放って、じとじとしている、と思ってるのにちがいない。

来なければいいのだ、と唐突な愛国心にかられてハナンは思い、道ばたのバゴン・バゴンにはりついていたサトウナメクジのおそろしくでかいのをシュッと舌でおそい取ってルスにやった。

「ううん、ハナン、食べて」

「ルス、お食べ」

ルスがいらぬようなので食べてしまう。口の中にごわごわした感触と、甘くて生ぐさい汁がひろがる。サトウナメクジはヘボムシと同じほど、ハナンにはごちそうだ。

「よう、ハナン。＊＊＊——☆」

「＊☆∞＊！」

ひやかされるたびにハナンは口をパッと開いて超音波を出した。ルスのことで、からかわれるのは、とても腹立たしい。

「ハナン、そこにすわらない」

ルスは気に入りの円筒状のフールーを指さした。

二人はそこに丸くなった。

やわらかくユキムシは音もなくふりそそぎ、空気

にしめりけと、ねばりけとを与えている。ダゴンの民イームーはもともと、水とも空気ともつかぬゼリーの中に生息する生物である。あまりかわききったところにつれてゆかれると、死んでしまうこともある。

「ねえ、ハナン」

ルスはやわらかなのど声でいい、白いのどをひくつかせた。その緑色のうろこがつややかで美しい。

「いい天気。ね」

「ああ。いいね」

「あたし、こういう日、好き。ハナンは」

「ハナンも好きだよ」

のばした背中にユキムシがふりつもり、すいすいととけてゆく。それがとてもここちよい。

「とてもよくしめっていて、おだやかで、暗くて。こういうの、私たちの天気ね」

「ああ」

「西の岩地だと、日がかんかん照って、みんなうどけなくなっちまうって」

「みんなパウリスをみにいくって、えーと」

誰が、いってたのだろう。もう、忘れてしまった。

「でもどうしてパウリスを見るの？」

「さあ」

「ソラが行ったって。戻って来なかった」

「……」

「ハナンが行くんなら、私も一緒にゆくわね」

「行かないよ、いまは」

「ふしぎね。パウリスに一体何があるのかしら」

「さあ。わからない」

「あたしも少しだけど、ひきつけられる。パウリスって、なーに？」

「オモの巣箱じゃないか」

「オモって変」

ころころころ、とルスは笑う。

「固い箱に入って、どうするの」

「さあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo